

あれもよし其れもよし／＼此れもよし

忍びて通る塵の世の中

一八八九年十一月 広津友信 宛
『新島襄全集4 書簡編II』

新島襄にしては、珍しく弱気あるいはネガティブ志向の言葉に見えます。

これは、新島の教え子で、新潟教会に赴任した広津友信に向けて、新島が募金活動中の東京から送った手紙の中におさめられた歌です。

クリスマスチャンでない方には、実感のわかない問題でしょうが、当時の日本のキリスト教会は、同志社のような自由・自治を尊重する教派と、全員一致の規律を重んじる教派とが合同（合併）するかどうか問題になっていました。

そして、新島は何としても「自由教育」と「自治教会」を守るべきとし、合同することに反対していました。合同によつて、同志社の良さである自由が窒息して失われてしまうことを

恐れたからです。

しかし、新島の周囲には、公然と彼を攻撃する者が増え、同志社の同志の中にも合同に賛成する者が続出しました。合同することによつて、日本のキリスト教会の組織は大きくなりますが、新島はそれを人間的欲望の表れに過ぎないと断じています。説得しても聞く耳を持たない人々の様子を見て、新島はこの歌を詠み、彼に賛成していた広津に愚痴をこぼしているのです。ようか。

新島でもこのような愚痴をこぼすほどですから、人間誰しも物事がうまくいかない時はこんな愚痴を言ってみたくもなります。愚痴をこぼせる友がいることはとても大切です。孤独でなければ、再度立ち上がることができますから。

とみた
富田

まさき
正樹

同志社香里中学校・高等学校教諭